

平成21年4月20日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17320063
 研究課題名（和文） 古代ナム語の新研究：
 字音検索ツールとチベットビルマ語データベースによる解析の試み
 研究課題名（英文） A Study on the Ancient NAM Language from Dunhuang.

研究代表者
 池田 巧（IKEDA TAKUMI）
 京都大学・人文科学研究所・准教授
 研究者番号：90259250

研究成果の概要：

敦煌から発見されたチベット語写本に含まれる未知の言語である Nam 語を記録した資料について文献学的な調査と分析を行ない、これまで知られていた大英図書館所蔵本のほかに、フランス図書館所蔵のペリオ収集文献中にも同じ言語を記した写本の断片があり、紙背の漢文經典のテキストを分析した結果、もとはひとつの写本が断片されたものであることを実証した。また解読作業に不可欠なデータの電子化と比較研究のための各種資料の整備と解析を行なった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	4,400,000	0	4,400,000
2006年度	3,600,000	0	3,600,000
2007年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2008年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
総計	14,300,000	1,890,000	16,190,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 言語学・言語学

キーワード： 敦煌チベット文献 チベットビルマ諸語 ナム語 蔵漢対音資料 羌語支

1. 研究開始当初の背景

大英図書館が所蔵する Nam 語文献 IOL Tib J 736 は、もと India Office Library 所管の文書であり、イギリスの学者 Frederick William Thomas 教授が早くから着目して研究を行なった。1948年に Thomas はそれまでの研究成果を総合的に論述した専著 *Nam, an ancient language of the Sino-Tibetan borderland* を公刊した。本書の反響は大きく、刊行直後から少なからぬ書評が現れたが、解読の方法論よりもむしろ命名の根拠とな

ったこの言語の歴史的背景および社会環境の考証に批判が集中した。

Thomas が行なったテキストの分析と解読については、書評はいずれも部分的な指摘に止まり、全面的な批判は現れなかったが、R. A. D. Forrest がその書評で写本に見えるいくつかの語彙を漢語からの借用語ではないかと指摘したことを受け、Thomas が専著 *Nam* を刊行してから15年後の1963年、カリフォルニア大学の漢藏語研究家 Robert Shafer がテキストの綴字の特徴を検討して敦煌文献中のチベット文字による漢語の音写資料

との類似を指摘した。不幸なことに、Shafer の文章が現れたのち、チベット＝ビルマ語研究者の間に Thomas の研究した Nam 語文献とは、実は漢語の音写資料であったという誤解が広まり、Nam 語文献に注目する者はほとんどいなくなってしまう。

2. 研究の目的

Nam 語文献の解読を中心とした諸問題について多角的な分析を行ない、関連分野の研究成果の助けを借りつつ文献資料そのものと記載された文字言語の諸特徴を明らかにするとともに、この 20 年で深化した漢語音韻史の研究成果ならびに大量に蓄積されたチベット＝ビルマ諸語の新資料と対照することにより、Nam 語と漢語、あるいはチベット＝ビルマ諸語との関連性を全面的に再検討する。敦煌発見のチベット語文献ならびに古碑文を除くと、9 世紀に遡るチベット＝ビルマ諸語の文献資料は非常に限られている。それゆえ Nam 語が Thomas の主張したように羌系の古代語であるなら、チベット＝ビルマ語の歴史研究に重要な寄与をもたらす貴重なデータとなる。いっぽう Shafer の指摘したごとくこの文献がチベット文字による古代漢語の音写資料であるとすれば、この文献が如何なる漢語のテキストを音写したものなのか、その同定の研究が必要であり、漢語音韻史において藏漢対音資料と呼ばれる一連の資料との関連と位置づけが明らかにされなければならない。

3. 研究の方法

まず敦煌発見のチベット写本中に同種の言語が記された文献が他にも存在するか否かを探索し、Thomas の扱った Nam 語文献 IOL Tib J 736 と比較しつつ文献学的分析を行ない、資料の性質と相互の関連性を吟味する。資料の批判的検討ののち、当該文献に記載された文字データを電子テキスト化して解析を行ない、記述された言語を音韻／形態／文法のレベルごとに科学的、統計的に分析する。その際にはテキストに見える特徴的な語形と、語が連続して現れるフレーズの構造が解析の大きな手がかりとなる。

Nam 語が羌系の言語ではないかという予測に関しては、含まれる語形に羌系の言語を特徴づける単語と共通のものが存在するか否かが検討課題となる。語彙の比較にあたってはチベット＝ビルマ諸語の最大のデータベースであるカリフォルニア大学の STEDT プロジェクトの協力を仰いだ。そのほか、羌語支としてグループ化される諸言語に見られ

る特徴の歴史的発展を探求する諸問題の検討とその成果は、Nam 語文献の解析にも直結する課題として重視し、検証を行なった。

4. 研究成果

フランス国立図書館所蔵のペリオ収集になる敦煌文献のチベット語写本中に数点、未知の言語が記された資料が存在することは早くから指摘されていた。入手できた写真版により当該資料のチベット文字の綴りの諸特徴を検討したところ、P. t. 1246 と P. t. 1241 のふたつの資料が Nam 語文献であろうと判断された。その後フランス国立図書館にて当該文献を実見し詳細に比較検証した結果、大英図書館所蔵の Nam 語文献 IOL Tib J 736 と同じ言語が記録された文献であると確認できた。

つぎにこれらの文献の相互関係が問題になるが、これまで注目されなかった紙背の漢文テキストを比較分析してみると、いずれも鳩摩羅什訳「妙法蓮華経巻第四 五百弟子受記品第八」の一部であることが判明、大正大蔵経の校訂テキストに照らして P. t. 1246 が P. t. 1241 の上部からちぎれた 1 断片であること、また P. t. 1241 + 1246 は大英図書館所蔵の Nam 語文献 IOL Tib J 736 に先行する部分であり、間に漢文テキストで 8 行相当の欠落があることがわかった。こうしてフランス国立図書館所蔵のペリオ収集中の Nam 語文献と大英図書館所蔵の Nam 語文献とは本来 1 巻の写本が断裂したものであることを実証し、テキストの前後も明らかになった。

Nam 語テキストは、チベット文字をローマ字に転写してコンピュータに入力し、検索が可能な電子テキストを作成した。テキストの語形を検討した結果、音節を構成する音素の組合せから、チベット＝ビルマ語と共通する諸特徴が見られることに加えて、チベット文字の正書法を逸脱する綴字が散見すること、文末に動詞と見られる複雑な綴りの音節があることなどから、チベット文語によく似た特徴があることが判明した。すべての語形のリストは継続して作成中である。なお Shafer が指摘したように、テキスト中には漢語の音写によく似た綴りも散見されたものの、字音検索ツールによる分析の結果、明らかに漢語の語彙として漢字が同定できる語例は見つからなかった。よって Nam 語は漢語からの借用語が混在する可能性は依然として残るとはいえ、すべてが漢語の音写テキストではあり得ない。

Nam 語をチベット＝ビルマ語に属する言語として見た場合、単語の比較研究を行うにあたってはその基準として、チベット＝ビルマ

語にほぼ共通して伝承されている語形と、チベット＝ビルマ語のある言語グループにのみ見られる特徴的な語形とを整理しておく必要がある。前者についてはチベット＝ビルマ語の研究がすすみ、信頼できる祖語の語形の再構も進められているものの、ともすればチベット＝ビルマ語全般に普遍的な語形が重視され、特徴的な語形は排除されてしまう傾向もある。前者の普遍性の探求に比べると後者のいわば個性の共通部分についての探求は、研究があまり進んでいない。

Thomas 以来議論が重ねられてきた羌系の言語であるという予測がはたして的確か否かについては、従来の歴史的背景からの探求に加え、言語事実からの実証が不可欠である。そのためには羌語支と呼ばれる言語グループと共通の特徴を有するか否かを検討しなくてはならないが、羌語支に属する諸言語の内部分岐も大きいことから、基本的な課題として羌語支を特徴づける語彙とは何か、を明らかにしておく必要があった。

そこでチベット＝ビルマ語の全体像に照らして羌語支諸語の語彙を比較検討した結果、羌語支を特徴づける語彙として「腎臓、膿、尿、年、研ぐ、忘れる」の6語に加え「昨／今／明」(年)のセットがあることを実証し、それが文献に残る歴史上のチベット＝ビルマ語の西夏語にも共通することから、西夏語が羌語支に連なる言語であったことを実証的に明らかにすることができたのは、本研究の特筆すべき研究成果のひとつである。

語彙の比較検討にあたってはカリフォルニア大学の STEDT プロジェクトの支援を得ることができた。ここに記して謝意を表しておきたい。本研究の推進によって明確になった新たな知見と諸問題については、国際シナチベット言語学会などで随時報告を行ってきた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①池田 巧〈羌語支語言の特徴詞：試探西夏語和羌語支的關係〉《日本東方學》第2輯 中華書局 (印刷中) 査読有

②IKEDA, Takumi. 200 Example Sentences in the Mu-nya Language. (Tanggu Dialect) *ZINBUN* 40. Institute for Research in the Humanities, Kyoto University. pp.71-140. 査読無

③池田 巧「フランス国立図書館所蔵のナム語文獻」『敦煌寫本研究年報』第2號 京都

大學人文科學研究所 2008年3月 165-175頁 査読有

④池田 巧「《西番譯語》に記録されたリュズ語」福盛貴弘・遠藤光暁編『華夷訳語論文集』語学教育フォーラム 13 大東文化大学 2007年10月 95-106頁 査読無

⑤IKEDA, Takumi. Exploring the Mu-nya people and their language. *ZINBUN* 39. Institute for Research in the Humanities, Kyoto University. pp.19-147. 査読有

[学会発表] (計6件)

①IKEDA, Takumi. Declaratives in the Mu-nya Language. Paper presented for Workshop on Tibeto-Burman Languages of Sichuan. November 22nd 2008 at Academia Sinica. Taipei.

②池田 巧〈藏文注音夏文佛經〉第3屆西夏學國際學術研討會 2008年11月10日 於中国寧夏回族自治区银川市

③IKEDA, Takumi. Highlights in the Decipherment of the Nam Language. Paper presented for the 41st International Conference on Sino-Tibetan Language and Linguistics. September 18th 2008 at SOAS, London University.

④IKEDA, Takumi. Verbs of Existence in Tangut and Mu-nya. Paper presented for Mediaeval Tibeto-Burman Languages Symposium. September 17th 2008 at SOAS, London University.

⑤池田 巧〈羌語支語言の特徴詞：試探西夏語和羌語支的關係〉第40屆國際漢藏語言暨言語學會議 2007年9月28日 於中国哈爾濱市黒龍江大學

⑥IKEDA, Takumi. Some Historical Records on the Lyuzu Language in Southwest China. Paper presented for the 39th International Conference on Sino-Tibetan Language and Linguistics. September 16th 2006 at University of Washington, Seattle, U. S. A.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 巧 (IKEDA TAKUMI)

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：90259250

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

James A. Matisoff

STEDT at Department of Linguistics,
University of California, Berkeley. •

名誉教授

研究者番号：なし

(4) 研究協力者

岩佐 一枝 (IWASA KAZUE)

フランス国立科学研究センター (CNRS)

言語口承文化研究所・非常勤研究員

研究者番号：なし